

見本 『道ありき』 一章

【概要】

結納の日の結核発病の前兆と教師生活の回顧

【注釈】

- ・啄木忌：石川啄木の命日。1912（明治45）年4月13日。『石ころのうた』ほか17日と書かれているものもあるが、13日が正しい。＊「天才啄木の歌」（『白き冬日』）参照。「石もて追はるるごとくふるさとを出しかなしみ消ゆる時なし」という歌に胸を衝かれたと書いている。
- ・西中一郎：婚約者（仮名）。綾子の遠縁に当たる。『石ころのうた』にも出会いなどが書かれている。綾子と同年齢。
- ・婚約の日：この自伝は婚約の日に倒れるところから書き始められて、結婚式の日で終わる。
- ・T：旭川市の愛国飛行場のグライダーの教官。『石ころのうた』14章に書かれている。昭和22年栃木県物部村（現・真岡市）（『共に歩めば』所収の綾子の短歌による）で死去と推定。
- ・土井芳子：「芳子」は後に『銃口』のヒロインの名前になる（ただし、女学校時代の恩師根本芳子先生も有力）。綾子はくり返しこの逸話を語った。＊1987/5/23 青山学院大学講堂での講演「愛すること 信じること」（DVD『三浦綾子の軌跡』所収）など。

【設問例】

- Q 何故その日は啄木忌であったと書いたのでしょうか？
- Q 堀田綾子は土井芳子の何に憤り、何を教えたかったのでしょうか？
- Q 土井芳子は堀田先生のことをどう思ったのでしょうか？
- Q この芳子と綾子の逸話は『道ありき』全体の中でどんな意味があるのでしょうか？

【解説】

昭和21年4月13日、結納の日に綾子は倒れて、一ヶ月半後の6月1日には発熱して、13年にわたる結核療養に入ることになります。三浦綾子はここで故郷を追われた啄木と、教師を辞め、こよなく愛した子どもたちと別れて学校を出て行かなければならなくなった自分自身を重ねています。が、それはまた、旧約聖書の「創世記」で、罪を犯したアダムとエバがエデンの園を追放されたこととも重ねられているでしょう。堀田綾子の敗戦体験は、ひとつの罪の体験でもあったのです。もし間違ったことを教えていたのならば、そして子供たちを戦場に送るような教育をしていたのならば、子供たちに対してどのようにして詫びたらいいのだろうという痛恨の思いがあったでしょう。

土井芳子に対する怒りは、人の淋しさをわかろうとしないことへの怒りであり、仲良くしたい心を見捨てる、冷酷さへの怒りであったでしょう。淋しさや辛さへの理解が人間としての成長には必要だという思いが出ています。〈仲良くできない人間の性質〉への嘆きは『氷点』以来の多くの物語やエッセイの夫婦観、家庭観、社会観、平和観の核にある問題で、『母』や『銃口』に至るまで一貫した三浦文学の課題でした。

芳子に対する堀田綾子のこの厳しさは、芳子の成長への期待と、分かってくれるという信頼でもありますが、それはまた人を信じて育ててくださる神と人間の関係にもつながっているのかも知れません。長すぎる罰とも見える時間、それは何かを悟り何かに出会い、養われるために用意された時間でもあることを、13年の闘病を経験してこれを書いている綾子は知っていたでしょう。

＊予定作品：『氷点』41章『続氷点』40章『道ありき』58章『塩狩峠』21章『この土の器をも』32章『石ころのうた』14章『細川ガラシャ夫人』27章『天北原野』24章『泥流地帯』（全）23章『海嶺』36章『千利休とその妻たち』27章『愛の鬼才』15章『ちいろば先生物語』35章『母』7章『銃口』37章、短篇小説集『病めるときも』6篇『死の彼方までも』4篇『毒麦の季』5篇『雨はあした晴れるだろう』4篇 ＊長い章、重要な章は分割になります。代表作と比較的読解の入口の難しい短篇小説を、使用頻度（人気）順に制作してゆきたいと思います。